

〔巻頭言〕

家族看護学 10年の歩みと今後の課題

東海大学健康科学部

鈴木 和子

日本家族看護学会が発足したのは、今からほぼ10年前の1994年のことである。また、本学会誌の第1号は翌年の1995年に発行され、本号は、第10巻目に入った。10年一括りとすると、また新たなスタート地点に差しかかっているとも言えよう。この10年間で家族看護学は、看護学を「家族」というキーワードでくり直し、患者など個人のみではなく、家族というグループを対象としてケアに取り組むという新しい看護学の構築に挑戦してきた。そして、丁度10年を経て、看護に新たな意味と豊かさを加え、看護学という学問体系を一步前進、成長させることに何らかの貢献をしたとは言えないだろうか。

このように、家族看護学の構築に伴う一連の過程で予想以上の成果を挙げてきたと評価することができるならば、ここで一度立ち止まって、これまでに何ができたのか、そして、これからの課題は何なのかを考える必要がある。

学会発足当初は、家族看護学に関する海外文献や書籍の翻訳、紹介が盛んになされ、わが国に家族看護学という学問の存在を周知させた。また、シンポジウムなどを通しての情報や実践報告により、多くの看護職が啓発を受けた。その後、わが国にも家族看護学のテキストがいくつか出版され、看護学の基礎教育課程に家族看護学が位置づけられるようになった。そして現在では、家族看護の専門看護師を目指す修士課程もできて、高度な家族看護を实践、指導する専門的ナースの誕生が期待されるまでに至っている。

このように家族看護（学）が成長してきた背景には、よく言われるような在宅ケアへの早期移行という医療システムの方針の転換による影響だけではな

く、すでに世の中に病いや健康問題に悩む家族のケアニーズが深く潜在していたという事情が考えられる。その他にも看護職が自らの看護の質を上げる手だてを模索していたこと、看護学が新たな役割や学問としての独自性を希求していたことなどが挙げられよう。それらの要因から家族看護（学）は、時代の要請に合致し、今日の姿までに成長したと考えられる。

しかし、家族看護（学）の発展は、これで十分ということでは決してない。というのは、家族看護の対象である「家族」というものの有り様は、国の文化の違いで大きく異なり、しかも時代とともに常に変容しているからである。巷では、わが国の伝統的な家族はすでに崩壊してしまったと極言する論調もある。反面、家族の力を高く評価し、再生に期待したり、「家族というもの」という概念的な枠組みで新たな家族像を創ろうとする試みもみられる。

そういう意味から今後の家族看護学の進むべき方向としては、わが国の文化的、時代的な家族の特質に合致した家族看護学を常に模索し、看護学の一分野としての更なる学問的構築である。また、今喫緊に求められることは、あらゆる家族の問題に対応する豊かな実践的方法論を開発して家族のニーズを充たし、これまで蓄積されてきた知的財産を社会に還元するという社会的貢献を果たすことであろう。

本号では、千葉大学のCOE拠点からの報告で、わが国の文化に相応しい家族看護について特集が組まれているが、それらの課題に敢えて挑む、まさに時を得たものである。